

聖書：使徒3：11～26

説教題：メシヤと定められたイエス

日時：2013年6月23日

前回は美しの門にすわっていた男の癒しが記されました。ペテロが彼に向って「ナザレのイエス・キリストの名によって歩きなさい」と命じると、40年以上も歩いたことのなかった彼が、躍り上がってまっすぐ立ちました。さらには歩いたり、跳ねたりしながら、神を賛美しました。この男は毎日、宮の門に置いてもらっていた人でしたから、人々は彼のことを良く知っていました。その彼の変わりぶりに人々は非常に驚いて、ペテロとヨハネの所に一斉に集まって来ます。そしてここでペンテコステの日続くペテロの2回目の説教がなされることとなります。

今回の彼の説教にも共通して言えることは、「キリスト中心」であるということです。ペテロとしては自分のしたわざに驚いて人々が集まって来たのですから、少し前までは私こそ他の誰よりも一番！と豪語した彼ですから、自分を高く持ち上げようとする誘惑もあったことでしょう。ところがペテロは12節で「イスラエル人たち。なぜこのことに驚いているのですか。なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さとかによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。」と言って、すべての栄光を主に帰そうとしています。これはペテロが聖霊に導かれている証拠です（ヨハネの福音書16章14節）。その聖霊に導かれたペテロの説教を、以下三つのポイントで見に行きたいと思います。

まず第一に彼が述べていることは、この奇跡を行なったのは誰かということです。それは十字架を経て今や栄光に入られたイエス・キリストである。ペテロはまず、人々がイエス様をどのように扱ったかを述べています。一言で言えば、彼らはイエス様を拒絶した。イエス様を見捨てた。イエス様など不要であると言って、十字架につけた。ところがそのイエス様を神はよみがえらせ、栄光を与えられました。そのイエス様がこのみわざを行なったのであるとペテロは説明したのです。

ペテロはこの際、栄光に先立つ低い歩みについても触れています。12節に「しもベイエス」とあります（イザヤ書42章や53章の「苦難のしもべ」）。イエス様は私たちの罪を背負って、私たちを救い出す救い主となるために、しもべとなって来て下さいました。そして十字架上でご自身の命さえも捨てるという究極的なしもべの歩みをささげられました。その苦難と死を経て、栄光に入られたのです。ですからイエス様の十字架におけるむごたらしい死は、無意味な出来事ではなかった。それは私たちの罪を全部その身に背負う救い主の姿でした。そのことを経て栄光に入ったお方として、イエス様はどのような罪人をもご自身の望むままに救い、祝福することができる救い主となられたのです。

これは旧約聖書にずっと示されて来たことだ、とペテロは言います。彼は13節で「アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち、私たちの父祖たちの神は」と切り出し、この神と今日の前にしているイエス・キリストの出来事は関係があると語ります。また18節：「しかし、神は、すべての預言者たちの口を通して、キリストの受難をあらかじめ語っておられた・・・。」旧約の預言はキリストを示していた。22節：「モーセはこう言いました。『神である主は、あ

あなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる。この方があなたがたに語ることはみな聞きなさい。』 あのモーセもキリストを指し示していた。24 節：「また、サムエルをはじめとして、彼に続いて語ったすべての預言者たちも、今の時について述べました。」 苦難を経て、栄光に入られたイエス・キリストによる救いは、神がずっと昔から約束して来られた救いの成就だったのです。

もしそうであるなら、人々は大変なことをしたことになります。第二にペテロが語っていることは、彼らに対する悔い改めの勧告です。13～15 節にあるように、彼らはイエス様をさばくために引き渡しました。ピラトが釈放すると決めたのに、その前でこの方を拒みました。人殺しの男バラバとどっちを釈放するかと問われた時に、人殺しの男を赦免するように要求して、きよい正しい方を拒みました。そしてついにいのちの君を殺しました。これは神に真正面から反逆する行ないに他なりません。しかしペテロは 17 節で、彼らがこのようなことをしたのは「無知のため」と言います。これは彼らに言い訳の余地を与えるためのものではなく、彼らに赦しの可能性を開くためのものです。1 コリント 2 章 8 節：「この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。」 本来はこのことに関係なく、罪は罪として裁かれて当然ですが、神はこうして、彼らは「無知だったから」と言って、なおあわれみを施す余地を残してくださっているのです。18 節も私たちが良く思い巡らすべき言葉でしょう。以前に見た 2 章 23 節と同じですが、神はこのような仕方での私たちの救いを備えることを前もって語っておられた。注意すべきは、神がユダヤ人たちにイエス様を殺すように仕向けたのではないということです。彼らは誰かに強制されることなく、自分たちの意志でそれを行ないました。しかし神はその悪を用いて、逆らう私たちの救いをこのように備えてくださった。この神を知るなら、何と私たちは御前に触れ伏し、心からの感謝をささげなければならないことでしょう。

そしてペテロはユダヤ人である彼らの特権と責任を強調しています。25 節で彼は聴衆がアブラハムを父祖とする契約の子孫であることを述べて、26 節で「神はまずあなたがたに、しもべを立てて、遣わされた」と言っています。新改訳聖書は 26 節の「まず」という言葉を「しもべを立てて」にかけて訳していますが、この「まず」は「あなたがたに」にかかる言葉です。25 節に「あなたの子孫によって、地の諸民族はみな祝福を受ける」とありましたように、ユダヤ人が異邦人に先んじて祝福を受けます。そのあなたがたにまず、救い主が与えられたのだとペテロは言っているのです。これは大いなる特権であると共に、大きな責任を伴うことです。もしこの特権を軽んじ、応答しなければ、それだけ彼らは責任を問われます。だからふさわしく応答せよ！とペテロは述べたのです。

もちろんペテロがこう語ったからと言って、この御言葉は異邦人である私たちにはあまり関係がないということにはなりません。「まずユダヤ人に」という御心で神がみわざを進められたにせよ、神は初めから全世界の祝福のためにすべての計画をしてくださいました。また私たちがイエス様を直接十字架につけたのではないにしても、根本的な意味でイエス様を十字架につけたのは私たちと言えます。私たちの罪が、イエス様を十字架へ追いやったのです。私たちはこのペテロの説教に示された神の大きなあわれみをわきまえず、自分勝手な生活をして来たかも知れません。しかし神は 17 節にあったように、それを「無知のため」と見なして

いてくださいます。なお私たちが神に立ち返り、神と正しい関係を持つための道を開いてくださっています。私たちはこの神にどのように答える者でしょうか。神がキリストにあって差し出している救いをすでに受け取り、この祝福の道に歩んでいるのでしょうか。

三つ目のポイントとして見たいことは、悔い改めて神に立ち返る者にどんな祝福が注がれるか、ということについてです。ここに三つの祝福が示されています。一つ目は 19 節にあるように「あなたがたの罪がぬぐい去られる」ということです。神であるお方が人となって十字架上で払われた犠牲はあまりにも大きいので、私たちのどんな罪をも完全に拭い去ることができます。イエス様を十字架に付けたという途方もない罪も然りです。取り消したくても取り消すことのできない私たちの罪、またこれから犯すであろう罪のすべてをぬぐい去ることができる。私たちにもそれぞれ消しゴムで消せるなら消したい過去の罪の記憶があるでしょう。人の前にはとてもさらすことのできない、それを思うと心が落ち着かなくなる、罪や過ちがあるでしょう。その罪を神はキリストにあって拭い去ってくださるのです。イザヤ書 43 章 25 節：「わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。」 神はキリストにあってこのことをしてくさるのです。

二つ目の祝福は、20 節の「主の御前から回復の時が来て」ということ。ここで「回復」と訳されている言葉は、リフレッシュメントという意味の言葉です。「休息」とか、「一息つく暇」という意味です。口語訳と新共同訳は「慰めの時」と訳しています。これは 19 節で語られた、罪がぬぐい去られることの肯定的側面のことでしょう。つまり私たちは自分の罪がキリストにあって拭い去られる時に慰めを得る、休息を得る、息つく暇を得る、リフレッシュを得る。罪の問題が解決しないと、私たちの心はそのことで常に責められます。日中は忙しさに紛れて、そのことを忘れていたようであっても、何かの時にそれは思い出され、自分を苦しめる。それは私たちの重荷となり、ストレスとなり、私たちは心身ともにエネルギーをすり減らし、疲れ切ってしまいます。しかしキリストにある罪の赦しは、私たちをリフレッシュするのです。それは私たちに安らぎを与えます。私たちはそこに神と正しい関係に立つところから来るすがすがしさ、健全な状態を頂くのです。

そして三つ目の祝福は、イエス様の再臨の時に完成する万物が改まる祝福です。キリストは天の高さにあって一切を治め、すべてを完成の状態まで導いた後、万物を父なる神にお渡しになります (1 コリント 15 章 24~25 節)。聖書が示している将来とは、今あるものがすべて捨てられ、全く新しい世界が出現することではなく、今あるものがきよめられて改まることです。ローマ書 8 章にも、この世界の被造物全体はやがての栄光の日を待ち望んでうめいているとあり、それはこの世界には最後には贖われるという希望があるからであるとあります。罪の問題が解決され、罪の呪いが取り除かれて、この世界に神が本来持つておられた良い目的が回復され、本来の輝きを取り戻して行く。それは私たちが見たこともないようなあまりにも素晴らしいものであり、「新しい天、新しい地」と言われています。足のなえた人の癒しの出来事は、万物が改まって本来の状態を取り戻す日の来ること、すべてが神の最初の意図にかなって美しく輝きを放つ日の来ことを指し示しています。ですから私たちが今見ている世界が最後ではない。神の私たちに對する約束は、罪が一切拭い取られた世界が来ることです。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しきもない、病氣もない、神の光と十分な臨在が満ち溢れている世界、

そしてもともと神のかたちに造られた私たちがいよいよ神ご自身を映し出す者となる世界が来るのです。そういう神の美と輝きで満ち溢れる世界へ、神はキリストにあって私たちを招いておられるのです。

この祝福にあずかるためには、神が立てておられる唯一の救い主キリストにより頼まなければなりません。23節：「その預言者に聞き従わない者はだれでも、民の中から滅ぼし絶やされる。」 私たちはよく考えて、自分の永遠の行き先を選び取らなくてはなりません。罪のために様々な苦しみ、悩み、病、弱さ、困難、戦いの中にある私たち。ともするとその中で気力を失い、絶望に至る私たち。しかしキリストは私たちの罪を拭い去り、私たちにリフレッシュメントを与え、やがて万物が改まる栄光の救いに導き入れてくださるお方です。私たちはこの祝福を備えてくださった神を無視して歩いて来たことを認めるなら、悔い改めをもって今日、神に立ち返りたいと思います。そして神がメシヤと定めて私たちに差し出しているイエス・キリストにより頼み、この方によって栄光の日を待ち望む喜びと希望に溢れた救いの道を歩む者へ導かれて行きたいと思います。